

旧高鳥砲台火薬庫

高鳥砲台は、1901年に南へ約4.5kmに離れた高鳥丘陵に設置された。この火薬庫は、28センチ砲6門を配備するための火薬と弾薬を貯蔵するため、砲台の近くに建てられた。1967年、火薬庫は高鳥山から現在の入船山記念館に移設された。

日清戦争（1894～1895年）後、帝国陸軍は呉海軍港と広島港を敵船の接近から守るため、呉の島や山間部に砲台を設置した。しかし、1920年代後半になると、戦争の焦点は海戦の砲撃から空中戦へと移っていった。高鳥砲台をはじめ、ほとんどの砲台が戦場で使われることはなかった。

火薬庫の構造は火薬保存の繊細さを反映している。砲弾を保管するための理想的な条件と、万が一爆発した場合の被害をいかに軽減するかの両方を考慮しなければならなかった。火薬は水に濡れると使えなくなるので、庫内を濡らさないようにするための工夫が随所に施されている。建物自体を地面から高くすることで下に空気の流れを作り、温度を一定に保ち、雨水の流出から火薬を守る。湿気が火薬に届かないように、壁はできるだけ気密性を高めるために慎重に作られている。重厚な石垣と軽量のトラス屋根が対照的である。爆発時には、厚い石垣が火薬の爆発力を上方に向け、軽量の屋根が吹き飛ばすことで、建物とその周辺への被害を抑えることができる。

当時の軍事建築の技術水準の高さを示すこれらの特徴から、2011年には火薬庫が国の登録有形文化財に登録された。